

集えカーラー 北見に新ホール開業

㊤

市民スポーツ

リーグ戦増、技術向上へ

「はい、スワイプ！」「ハリー(早く)」。10月中旬、北見藤高カーリング部女子の

水ではなく、校内のホールの床。本物のアイスの上で練習ができない間、校内ではおなじみの風景だ。



部が11～3月のシーズン中に練習の場としていた北見市中心部の「河西建設カーリングホール」(今年3月営業終了)は冬場のみの季節営業で、夏場は使えない。市内のもう一つの施設である市常呂町の「アドヴィックス常呂カーリングホール」は夏場も営業しているが、中心部から車で約1時間。保護者の送迎が不可欠で、頻繁には行けなかった。

一方、市は子どもたちの授業や観光客の体験を通じた「カーリングのまち・北見」さらなるPRにも乗り出す。市教委は、来年度の小学校の体育の授業にカーリングを導入する方針。市観光振興室もカーリング体験を組み込んだツアーの誘致に前向きだ。

そんな中、市中心部、北見工大近くの市柏陽町に、通年営業の「アルゴグラフィックス北見カーリングホール」が間もなく開業する。部男子の間もなく開業する。部男子の顧問の本田一貴教諭(48)は「今までは氷上練習の間隔が開いてしまっていた。毎週できれば選手の上達も早まる」と心待ちにする。

市中心部の新ホール開業によるカーリングの市民スポーツ化。ただ、すでに課題も浮かび上がっている。その一つが指導者の確保。支部内で資格を持った指導者は約10人いるが、ほとんどが仕事を抱えているため、授業や体験希



望を受け入れられるだけの体制強化が必要になる。また、公式大会を開くには4シートは必要とされることから、3シートのみで観客席もない新ホールは「単なる練習場の位置付け」(市内の関係者)との厳しい指摘もある。指定管理者「カーリング北見」は、6シートを備える常呂ホールで大会が開催されれば、「選手が大会前に練習をする際のサブ施設になる」と狙いを語る。ただ、選手たちは地理的に近い網走市に宿泊することが多く、常呂から1時間の新ホールを使う選手がいるのか、北見の市街地にも宿泊や飲食などの経済効果が及ぶのかは未知数だ。

カーリング北見の理事で、協会北見支部の安齋秀一支部長は「利用者が『来てよかったね』と言ってくれるような特色のあるホールにしていきたい」と力を込める。市民やカーリング界の大きな期待を背負って誕生する新ホール。その今後に注目が集まる。

(朝生樹)



31日にオープンする北見市柏陽町の「アルゴグラフィックス北見カーリングホール」=17日(本社ヘリから、高橋義英撮影)

が、これまで冬期間のみだ

31日に開業するアルゴグラフィックス北見カーリングホールを取り巻く現状や課題を考察する。(2回連載します)